

【試し読み版】



八坂書房

10

【第VI卷第2章】

【第VI卷】

2

ドイツに和平が成就したとの
最新ニュースを得て、悪魔の王
ルシファールはいかにふるまったか

遙か昔の時代、キリスト教会に属する人びとのなかでとりわけ深く神に帰依した者は、苦行ないし〈肉〉の根絶に取り組む場合、祈りを唱えるか、断食するか、もしくは睡眠断ちを行うものであったことが、いくつかの書物からわかる。まず最初の二つについては、わたしはあまり熱心に実践することはなかったが、それは三つ目についても同じことが言えて、つまり自然界のすべての動物たちと共有するこの負い目に、さあ従いたまえと肉体から求められたなら、わたしは唯々諾々と服従して、甘美なる眠りの忘我に酔うのであった。

ある日わたしは一本の樅の木蔭に座り、何をするでもなく無為に過ごしながら、ふと頭に浮かんできた何の益もな

い問いかけに、しばしの間かかずらっていた。すなわちそれは、〈吝嗇と浪費、つまりケチと無駄使いとでは、いったいどちらが強く、またどちらがよりひどい悪徳なのだろう？〉という問題である。何の実も益もない問いかけ、と今わたしは言った。これをもう一度強調させてもらおう！なぜなら浪費の問題にかかずらおうと言ったって、そもそも当の自分には浪費できるだけのものが何ひとつ手もとにないわけだし、それに吝嗇、あるいは強欲について考えてみるなんて言っただけで、今こうして、みずから望んで選びとった暮らしは、貧乏とモノの不足のなかで生きること、を自分で選択した結果にほかならないのだ。それなのに、ああ、愚かなことよ、あの問題の答えを知りたくて知りた

くて、どうにもならなくなったわたしは、この物思いから脱け出せなくなったばかりか、しかも思案しながら、いつしかそのまま眠りこんでしまったのである。

目覚めているあいだに頭が從事していた物ごとは、眠っているあいだにもその人を苛むのが常であり、まさにそれと同じことがこの時のわたしにも起こった。目を閉じるやいなや——、怖気をふるう遙かな深淵のなかに、地獄の大王ルシファア⁽²⁾が玉座に座る姿が見えたのである。ところがルシファアは鎖で縛られており、思いのままに世界を荒らしまわることができない。ルシファアを取り巻いている地獄の悪霊たちの多くは、この地獄の大権のため粗相のないよう、あくせくと大王の世話をしていた。地獄の廷臣たち

のそんな様子をわたしが眺めているうち、とつぜん宙を貫いて、猛然とひとりの使者が飛んできた。そしてルシファ一の面前に降りたつと、こう言ったのである。

「ああ、大王陛下、ドイツで結ばれた和平の⁽³⁾ことでございますが、あれはほとんどヨーロッパ全土に広がって、ふたたび平穏な世を生み出してしまふ勢いです。〈天ニ栄光アル⁽⁴⁾レ〉とか、〈神ヨ、アナタヲ誉メタエマス〉といった歌があちこちに響きわたり、これ以後は〈自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に〉⁽⁵⁾暮らして、一心に神に仕えてゆきたい、などと誰もが申しておる次第なのです」

この知らせを受けとるや、ルシファアは何とも驚愕した様子を見せ、人間たちがそのような幸いを手にしたこと、

激しい怨念に震えているようだった。やがていくらか落ち着きを取り戻すと、ルシファーは、そもそも地獄の王国がこれまで手にしてきた定期収入のうち、この平和のせいでのくらしいの損失、損害を被ることになるかを心中で計算してみた。この時のルシファーは、なんと恐ろしい怒りを爆発させたことだろう。おぞましいギリギリという音をたてて歯を食いしばり、その恐怖の物音は遙か遠くまで響きわたった。怒りと苛立ちのあまり、ルシファーの両眼からはギラギラと恐るべき光が放射され、まるで稲妻のように硫黄の炎が噴き出しては、ルシファーの住まいを隅々まで明るく照らし出す激しさだった。

破滅した哀れなる人間たちの群れや下級の悪霊たちだけ

でなく、地獄の最も高位の王侯、枢密官たちさえも、この光景には恐れ戦いていた。とうとうルシフアーは大岩にむかつて角を突き立て、地獄の全体がグラグラと揺れた。荒々しく暴れまわる大王に、部下たちはやがて、あの鎖がちぎれてしまうのではと、さもなくば大王はすっかり頭がおかしくなり、狂気の境に陥ってしまうのではと気が気でならなくなった。それゆえしばしの間、誰ひとりとしてルシフアーのそばに近づくことができず、ましてひと言でも声をかけるような勇気のある者はいなかった。

そこへ大胆にもしゃしゃり出たのが、下っぱ悪魔のベリアルである。ベリアルは言った。「偉大なる大王陛下、あなたさまのような並ぶ者なき王者であるお方が、そのような

ふるまいに及ばれるとはいかなることありましよう。いや
はや、いったいどうなされたのです。最高位の君主ともあ
られるお方が、己れを忘れてしまわれたのですか。⁽⁷⁾ いや、
このような見慣れぬお姿を、わたくしどもはどう理解すれ
ばよいのです、いとも高くあらせられる陛下にとり、その
ようなお姿は決して有益とは申せず、陛下の誉れを増すこ
とにも到底なりませんぬが」

「ああ！ ああ！ ああ！」ルシファーは答えた。「わ
しらが皆ぐうたらぐうたらと、呑気に寝坊をしておるあい
だに、地上世界で最も愛する果樹園ともいうべき、あの^{レルナ}（罪
^{マロールム}沼）、たいへんな思いをして苗を植え、たいへんな苦心を
してこれを育て、たいそうな暴利の果実を収穫してきた、



あの悪の巢窟が今や、ドイツの国土からすっかり根絶されてしまったではないか。もしわしらがこのまま何も策を講じなければ、やがては全ヨーロッパからも、この果樹園は葬り去られてしまうであろう。それにもかかわらず、おぬしらのなかに、この件を真剣に受け止めておる者はまったくおらんのか！ この罪深き現世はあと残りわずかの命しかもたぬのに、その時間を呑気にも過ぎるに任せておくことは、われらの恥辱でしかありえぬ。この寝ぼけたマヌケ猿どもめが、この終末の時にあつて、わしらは今こそ史上最大の収穫が得られるのだ、ということを知らぬはずがあるまい？ せっかくの世の終わりを前にして、もしわしらが老いぼれ犬さながらに、もはや獵に出る気力もなく、た

だの役立たずになり下がらるなら、地上は立派に統治された国となつてしまおうが。

このたびの戦争は、開始当初からその後にかけてずっと、わしらの期待した収穫高にきっちりひとしい実りを授けてくれたものだが、それなのに戦さの神マルスが、今やポーランドを別としてヨーロッパから立ち去り、常のごとくに、この神さまが〈罪の沼〉レルナ・マロールムの繁茂し栄える場所を求めて、どこかへ姿を消してしまふとしたら、いったいわしらにどんな希望が残されているのじゃ！」

怨念と憤怒に満たされたルシファアは、こんな考えをただ語るといふより、むしろ雷鳴のごとくにぶちまけたのであつたが、この流れからそのまま、さっきの狂乱状態へた

ち戻りそうになった。それをなんとか制止したのはベリアルで、こんなことを言った。「たしかに目下の状況はそのとおりであります、だからといってわれらの士気を萎えさせる理由など皆目ありませぬし、逆風に吹きつけられた弱々しい人間どもと、よもやわれわれが同じふるまいに及ぶ必要もありません。ああ、大王陛下よ、あなたさまもご存じでありましょう、人間は剣によってよりも、むしろ酒によって滅びていくということを。静かな平和の時というもの、必ず快樂をおんぶして一緒に到来するものでございます。ならば、この状況は人間にとって、それもとりわけキリスト教徒にとって、戦さの神マルスよりもずっと大きな害悪をもたらすことができるチャンスなのではございません。

ますまいか。〈キリストの花嫁〉たる教会の数々の美德も、究極の悲嘆のなかでこそ最も神々しく光を放つことは、広く世に知られているところでもありますしな」

ルシファアは答えて言った。「わしが常に望み、願い求めるのは、人間どもがこの現世の生のなかでただ災厄にのみ出会い、死後においては永遠の苦悶にさらされること、それだけだ。ところがわしらが頓馬でノロマなために、人間どもには現世の幸福を味わうことを許す羽目になったばかりか、おまけに永遠の至福まで手に入れさせかねない始末ではないか」

ベリアルは答えた。「滅相もありません！ わたくしの職務が何であるかは、陛下も十分にご承知のはず。わたくし

はそのために閑暇を惜しみ、陛下のご意志を、お望みを、必ずや実現すべく全力を尽くす所存であります。つまりヨーロッパの地に、これからも末永く〈罪レルナ・マロールムの沼〉を繁茂させること、さもなければ、この〈エウローパ嬢(11)〉の頭髮に、今までとは違う、別の厭わしいイガイガをくつつけてやることを！ とはいえ、大王陛下にもぜひお心の片隅にとどめおいていただきたいことがございます。ヨーロッパの行方について、もしかの〈大ヌいーなるメものン〉(12)がわたくしとは異なる考えを抱かれるのであれば、その時はもはやこちらには何の手出しもできませんので、なにとぞその点は——」

〔訳註〕

- (1) 古代教父の聖人伝が当時は数多く出版されていた。
- (2) 黙示録 20, 1-3; ユトローニ 2, 4 を参照。地獄の王の姿は、当時の絶対君主の否定的イメージをなぞって描かれている。作者はこれ以降の叙述のためにアルベルティーンヌスの著書『ルシファアの王国と魂の狩猟』(ミュンヘン、一六一六年) を利用している。
- (3) ウェストフアリア条約のこと。V-5章註4・22章註9を参照。
- (4) 前者はキリスト教の礼拝の基本的要素であり、後者のアンブロシウス讃歌は平和の祝いの儀式で歌われることが多い。
- (5) ミカトに基づく。III-4章註12を参照。
- (6) ヘブライ語で「救いなき者、無価値なる者」の意。ここでは下役の悪魔として悪を体现する。
- (7) 当時の宮廷において君主と廷臣は感情(Affect)の完全なる自制を求められた。
- (8) 原語 *lerna marorum* の直訳は「悪のレルナ」。ギリシャ南部の主要都

市アルゴスの近くにある湿地帯。ギリシャ神話のヘラクレスはこの「レルナ」に棲む九頭の龍ヒュドラを退治する。

(9) ルシファアの王国、すなわち地獄でも、黙示録 20. 2 に基づいて終末意識が共有されている。冒頭 (I-1 章) から (ムンメル湖) エピソード (V-15 章) を経て、この「続編」つまり第 VI 卷へと一貫する主題。

(10) ポーランドは一六四八年からコサック、ロシア、スウェーデンとの戦争の舞台となる。

(11) ギリシャ神話におけるテュロス (現レバノン) の王女。白い牡牛に変身したゼウス (ユピテル) に乗って海を渡り、クレタ島でゼウスとのあいだに三人の子をもうける。海を渡ってきた西方地域は後に「ヨーロッパ」の名で呼ばれる。

(12) 悪魔は神を *ゴッド* というそのままの名で呼ぶことを避けて、この言い換えをしている。III-3 章註 4 を参照。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その10

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年四月五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>